

コメント

渡辺 俊夫

私はコメンテーターとして、与えられた短い時間の中で、二つの点に焦点をあてて問題提起をしてみようと思います。まず第一に、日本のイメージが非文字資料によっていかに表現されてきたかという問題、さらに第二に、それでは、非文字資料と人類文化の記憶と記録との関係を探るという今回のシンポジウムの中心課題に、これがどのように関わってくるかという点です。

このセッションの三点のパネリスト・レポートの共通点は、いずれも 19 世紀においていかに日本のイメージが非文字資料によって表現されたかという問題をあつかっています。まず原信田氏は日本のなかでも特に江戸を広重がいかに表現したかを、『名所江戸百景』『浅草金龍山』の例などを挙げて、示しておられます。つまり大地震の前の江戸の状態の記憶のある江戸っ子に、その後の復興ぶりを記録し報告する。しかしそれを文字ではできない特殊な絵画的手法を用いて表現しているという点です。さらに Dobson 氏は、幕末から明治初期にかけて西洋人の商業写真家たちの撮った侍の肖像写真を取り上げ、これに単一の西洋の眼差しをみることの危険性を警告されています。つまり文字を使わない写真という情報は忠実な記録と思われがちですが、じつはイメージの製作者、そのモデルたち、そしてその写真をみる者たちの眼差し、意図、さらに解釈は、多様であり単一ではありません。Guber 氏は幕末に来日したロシア人モジャイスキーの素描の写実性に注目されています。もっともこれもロシア文化の中で育ったという彼の文化記憶というフィルターを通した写実による記録といえることができるでしょう。

私がこれらのレポートを読んで考えてみたいと思ったことは、文字の記録と非文字資料としての版画、写真、素描などの記録との誤差、さらにその誤差と記憶との関係です。幾つか例を挙げて検討してみましょう。

第一の例はドイツ・ルネッサンスの画家 Albrecht Dürer の犀の版画です。ご存知の方も多いと思いますが、この美術史上もっとも有名なイメージのひとつである超写実的な犀には、一つ記録として完全な間違いがあります。それは犀の肩の部分にある角です。よく知られているように、このイメージは非常な影響力があり、この肩の角は後の犀の図にしばしば登場します。犀にはこの他に肌のなめらかなタイプがあり、それを見た人の報告の記事の挿絵は、その滑らかな肌を描写しているのですが、何と依然としてあの間違っただ肩の角が存在しています。つまり非文字資料の記憶が文字の記録を無効にしてしまっているのです。

このような例を、このセッションのテーマである日本のイメージの描写のなかから選んでみました。この挿絵は 17 世紀に出版された Arnoldus Montanus の日本について書かれた大型本にでています。大体元禄のころの版画か何かをすこしは見たと思われる箇所もあるのですが、記録の正確性という点からみると、この非文字資料はかなり怪しいものです。それでは次の挿絵を見てみましょう。この挿絵画家が Montanus の挿絵によっていることは確かです。しかしこれは何と 19 世紀中頃にイギリスで出た、日本についての本な

のです。女性の服装の正確性が、前と比べるとずっと良くなっています。つまりこのころには17世紀に比べれば、文字あるいは非文字資料による記録の情報は豊かになってきており、この女性の服装、髪型なども前に比べれば日本のものに近くなっています。しかし前後が逆になった人力車のような乗り物は依然として Montanus によっています。つまりこの点に関しては、非文字の伝統がまもられているわけです。

次の例は日本の情報を伝えるにあたって、文字情報と非文字情報との間に極端な誤差のある場合です。これは Thodore de Bry が17世紀に出版した *Petits Voyages* という本の中の日本についての挿絵です。どうしてこれが日本かと思われるかもしれませんが、私はこれが東大寺を描写したものと解釈しています。よく見ると、中央の建物の前に、巨人が2人、しかも一人は口を開け、もう一人は口を閉じている。これは阿吽であり、あの有名な東大寺の仁王と思われます。さらに周りでのびのびと走りまわっている鹿をみれば奈良だということが判ります。つまりここでは文字の記憶の情報が、イメージとしては非文字資料である挿絵に伝わっていないケースです。そこで挿絵画家は自分の知っているローマ古典美術を流用しているわけです。

最後の例は19世紀後半に活躍したフランスの画家 Tissot の浴女図です。これは2メートル以上もある大きな絵ですが、かなり挑発的なジャポニスム初期のころのもので、日本的なディテールなどかなり忠実に再現しています。この絵の中央に外の景色が少しみえていますが、部分図をみると、なんとこれが先ほど原信田氏のレポートでみた広重の「浅草金龍山」によっていることが判ります。ただ、冬の景色だったのが、桜らしき花が咲いている春にかえられています。つまり Tissot にとっては、広重と違って、大地震の記憶は全く重要ではなかったというよりは、全然知らなかったというのが事実でしょう。更に江戸を記録するという意味も無かった。しかし広重の前例を使用することによって、非文字情報としてのより一般的な日本らしさを強力にアピールする効果的な手段となりました。

このような幾つかの非文字資料による日本のイメージの表現を検討することによって、今回のシンポジウムの中心課題である非文字資料と人類文化の記憶と記録との関係を見てまいりました。やはりこの問題は一筋縄ではいかない、複雑な多様性を持ったものでありながらも、研究のための非常に興味深い豊かな素材を提供してくれています。